

本研究では、日本近代児童文学における一般文学との関わりに注目し、日本近代児童文学の可能性や領域の拡大に一般文学がどのように関与したかについて考察した。

従来の児童文学研究では、作品のテーマや子どもに何を伝えるかといったメッセージ内容、社会的文化的事象や教育思潮時代思潮との関わりについての研究が主流を占め、一般文学との関係については検討が立ち遅れている現状にある。しかし、日本近代児童文学は、常に一般文学との深い関わりの中でその可能性や領域を拡大しており、その点を明らかにすることは、近代児童文学の持ち得た可能性や豊かさを明らかにする上で不可欠な手続きであると考えられる。以上の問題意識に基づき、本研究では創作児童文学に注目し、ジャンル形成期にあたる明治期と、一般文学との交流が最も盛んであった大正期から昭和前期（一九三〇年代）にかけての児童文学を対象に考察を試みた。

第一章明治期では、原抱一庵^{〔小説〕少年}「新年」^{〔小説〕少年}、青木嵩山堂、一八九二（明治二五）・一二・二八」と、小川未明『おとぎばなし集 赤い船』（京文堂書店、一九一〇（明治四三）・一二、以下『赤い船』とする）を考察対象とした。原抱一庵^{〔小説〕少年}「新年」は、同時代の少年小説と重なる面を多く持つ一方で、同時代の悲惨小説や観念小説と通底する意識や作者原抱一庵の政治意識が織り込まれており、体制強化のイデオロギー伝達手段としてあった当時の少年小説から逸脱する固有の側面を持つ。そうしたあり方は、ジャンル形成期にあつた明治期の児童文学が社会や、政治、一般文学との接点を多様に模索する姿勢を示すものであり、ジャンル形成期における少年小説の持ち得た豊かさや可能性の一端であることを明らかにした。第二節では、『おとぎばなし集 赤い船』について考察した。『赤い船』は、規範意識や教訓が敷設されているという点において同時代の児童文学の枠組みを共有しながらも、そこに作者小川未明の文学的立場

である後期浪漫主義の理念が反映している点に固有性が認められる。最終的にそうした浪漫主義文学の理念が複数の作品において優先され、前景化された結果、同時代の児童文学の枠組みを大きく逸脱し、相反する方向性を持つに至る。それにより浪漫主義の理念が児童文学に導入されることとなり、児童文学の位相拡大が果たされたことを明らかにした。

第二章大正期では、芸術的児童文学の中心にあった雑誌『赤い鳥』(一九一八(大正七)・七〜一九二九(昭和四)・四、一九三一(昭和六)・一〜一九三六(昭和一一)・一〇)の主宰者鈴木三重吉の童話に対する理念と、宮沢賢治の童話「土神ときつね」(一九二三(大正一二)〜一九二四(大正一三)について考察した。『赤い鳥』における鈴木三重吉の童話選評には、子どもの生活や心理を「人間の證券」として描き、人生の真実を象徴させることを理想とする三重吉の創作童話の理念の反映が確認できる。こうした三重吉の理念には、明治末から大正初期にかけての自然主義以後の一般文学の動向が反映しており、教育的観点に比重がおかれていたそれまでの児童文学に、自然主義以降の一般文学の理念や文芸思潮を直接的に接続する意義を持つことを明らかにした。第二節では宮沢賢治「土神ときつね」について考察した。「土神ときつね」では、物語の前半において作中の内面や様々な事象に説明を加え、意味づけを行う機能を担っていた語りが、後半では土神の情念という無形のエネルギーそのものを語りだすことへとその比重を大きく変換させていく。その結果、意味的な整合性や一貫性が捨象され、引き替えに土神の情念という無形のエネルギーの形象化と圧倒的な力強さやスピード感を描くことが可能となっている。こうした一義的な意味に収斂しない語りの力動性が作品の魅力の一端を担っており、そうした表現機構に目を向けることがテクストの総体を捉えることを可能とすることを明らかにした。

第三章昭和前期では、童謡同人誌『チチノキ』(一九三〇(昭和五)・三〜一九三五(昭和一〇)・五)と、昭和前期を代表する存在である新美南吉について考察した。『チチノキ』は、芸術志向と変革への意志の強さに特徴を持ち、同時代の文壇・詩壇との交差・連関が積極的になされていた。その結果白秋の理念を継承しつつも、それまでの童心主義的な子ども像から脱却し、社会性・自立性を持ち、現実の中で成長する強靱さをもった子ども像へと転換を果たすこととな

る。またモダニズムと深く交差する中で、子どもの新鮮なまなざしを通して、自明化された日常を異化し、既存のコードから切断された新鮮な感覚で対象を歌い上げるといふ新たな童謡の芸術性を獲得したことを明らかにした。第二節、第三節では、新美南吉の代表作である、「権狐」(『ごん狐』、『赤い鳥』一九三二(昭和七)・一草稿)と、「手袋を買ひに」を取り上げ、そこに、『赤い鳥』における鈴木三重吉の指導や、『チチノキ』の活動を通して獲得されたモダニズムの理念の反映が確認できることを指摘した。その点をふまえ第四節では、新美南吉の児童文学史上の意義及び位置付けを、特に初期から中期の子ども像の変遷に注目し、考察を加えた。南吉初期の子ども像には、大正期に童謡童謡運動を牽引した小川未明、北原白秋、吉田絃二郎の子ども観の反映が認められ、そうした子ども像はワーズワースが提示する浪漫主義的な子ども観に由来するものであることが確認できる。こうした子ども像は南吉作品において中期以降も継続されると考えられる。一方で同時代の文壇状況と交差する中で、現実的な子ども像への接近もはかられていく。その結果、現実をふまえつつ子どもから大人へと成長することを悲しみとする新たなテーマと、子どものまなざしを通して現実を照射するというあり方が児童文学にもたらされることになった。こうした点から、明治末期以来の浪漫主義の理念を継承しつつ現実との接続をはかり、新たなテーマ・あり方を獲得した点に新美南吉童謡の意義・位置付けが認められることを明らかにした。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	大木 葉子
論文審査担当者	(主査) 教授 佐藤 伸宏 教授 佐倉 由泰 教授 佐藤 弘夫 准教授 横溝 博
論文名	日本近代児童文学の研究
<p>本論文は、明治から昭和前期に至る時代の中で、日本近代児童文学が成立を果たし、独自の展開を見せていく、その経緯を詳細に跡付けたものである。論者は、その分析にあたり、それぞれの時代における文壇の動向と児童文学との関わりに視点を据えることをとおして、同時代の文学的状況との交流、交差を背景として日本近代の児童文学がそのジャンルを形成し、また領域と可能性を拡大していった動態を精緻に解き明かしている。全体は3章8節で構成されている。</p> <p>第1章「明治期の児童文学——〈少年小説〉〈おとぎばなし〉の可能性」は、近代日本の児童文学の成立期である明治期の児童文学を論じた2節から成る。明治期に成立した児童文学については、国家主義的なイデオロギーに基づく体制強化の手段として捉えられてきたが、第1節の原抱一庵「新年」論は、そうしたイデオロギーにのみ還元できない性格をこの「少年小説」に見出しつつ、ジャンル形成期の明治期児童文学の模索の様相を明らかにしている。続く第2節で論じられるのは小川未明『赤い船』であり、本「おとぎばなし集」の裡に浪漫主義を基底とする未明の文学的立場や理念が折り込まれていることを確認し、日本の児童文学に浪漫主義的なモチーフが導入されたことを指摘している。第2章は、芸術的「童話」を提唱する雑誌『赤い鳥』が発刊された大正期児童文学の問題を取り上げる。第1節は『赤い鳥』の主催者鈴木三重吉が誌上に掲載した夥しい数の「童話選評」に着目し、そこに自然主義以降の明治末から大正初期にかけての一般文学の状況が多様に反映していることを明らかにしている。第2節はそうした大正期児童文学の例として宮沢賢治「土神ときつね」を取り上げ、その語りの力動性が児童文学の新たな可能性や魅力を生み出していると指摘する。「昭和前期の児童文学——継承と発展——」と題された第3章は同時期を代表する童話作家である新美南吉を中心に扱う。第1節において南吉が深い関わりをもった雑誌『チチノキ』の体現するモダニズムの問題を確認した上で、続く二つの節において南吉の代表作「権狐」および「手袋を買ひに」を取り上げ、三重吉の「童話」の理念そして『チチノキ』のモダニズム的な理念が投影されていることを指摘している。最終第4節では、「子ども像」を中心に改めて明治から昭和初期までの児童文学の展開を辿り、それを貫流する浪漫主義の理念を確認することによって、南吉の童話がその理念を受容しつつ同時代の文学的状況との交差に於いて児童文学の新たな発展を示していることを指摘している。</p> <p>児童文学の研究はこれまで精力的に進められてきているが、本論は、一般文学との交流という新たな角度から考察を加えることによって、日本近代児童文学の成立と展開に関して多くの新見を提示しており、斯学の発展に寄与するところ大なるものがある。</p> <p>よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	